

聖朝女子立志編

千河岸實一校閱
上野理一編纂
卷一

種 類	修身部
號 數	1
冊 數	2

福岡縣立第一師範學校	
圖書部	
冊數	三
卷號	二
冊一號	一

B / 福岡第一師範學校
52 (學校圖書)

登錄 冊數	第	號
神學部		
倫理部		
修身部		項
目		次
全冊ノ内第		冊
分類 冊數	第	號
15.6		

圖書 和圖書 邇



a 1 3 8 0 3 2 2 3 0 3 a

福岡教育大学蔵書

T1A1

22

U 45

上野理一編述

干河岸貫一
關 德校閱

皇朝女子立志編

版權所有

吉岡寶文軒發行

皇朝女子立志編序



管者孟母斷機而孟子七編之錦成焉其
言曰聞伯夷之風者頑夫廉懦夫有立志
苟人而不立志則胸中無主茫乎迷方何
以組織德業乎哉今欲使夫人各立其志
則莫如使其聞古今聖哲之懿風以生景
仰欽慕之心也矧於教童男劣女之道乎
且男性陽剛而動故易曉通女性陰柔而

靜故或拘泥女教尤不可以不加謹焉。吾知友有竹上野君。夙存此婆心。頃者著一書名曰皇朝女子立志編。其所載皆取於吾邦古今女子婦德母儀嘉言善行之純正者。雖彼彤管風騷之麗白。月竒節之烈。或有嫌於德行者。不取焉。恐讀者不察其心而泥其跡也。君之用心亦至矣。願此書之出。諸府縣入校。幼女必袖一本。且

誦且講。以生景仰欽慕之心。而婦德母儀嘉言善行各從其性所近。朝薰暮染。如綺如繡。斐然成章。可知焉耳。果然則君之婆心。即孟母斷機之心。而此書則為諸府縣入校。男女授一善良師姆者歟。且聞君將有後編之作。以增其師姆焉。余愈益知關雎麟趾之風。不日施于邦內也。於是乎樂而為之序。

告

明治十有五年十二月南至日

播磨 節宇龜山雲平謹撰



緒言

一曩者千河岸氏日本立志編の著あり其書已に世に
傳播して廣益を爲るは人の知る所あり然るに只
其女子の事成叙するの多からざるが爲め或は其
遺憾を世人に與へゝむるのこをなきにあらざる夫
れ男子と女子とは其性の剛柔自のら別ある所あ
るば之が教育は供するの材料に至ても亦隨從て
異ならざるを得依て今自から揣らばて謾り
に日本立志編の欠を補ひ女子の孝貞節操才藝母
則の著したるものと蒐輯し名めて皇朝女子立志編
と云ふ

一此書ハ特ニ之ガ部類を區分び古今の次序を立てば或モ才藝の次に孝貞あり母則の上ニ節操ありて復孝貞を出し才藝を間み今人孰中に古人を交へ古人の中ニ今人を混ざるガ如キ更に一定を所なきハ元此著の趣意た多ク中小學校の生徒に女子乃道ヲ教へ其志を以て大ニ立つる所あらズ然んや或るものなれば務めて讀者を感動し易くして且倦ぎずんふと必要なるあり

一往古淳朴の風を存し秉彝の良發して孝となり貞となり其名九重ニ達して或ハ爵級を賜ひ或ハ租税を免ぜらるゝ即ち日本後紀文德實錄三代實錄

等に載る所のもの如き其人頗る多しと雖も外ニ操行の録すべきことあらざるは間ニ一二を舉ぐて餘も率ね省略ニ從ふ

一貞操才華世に顯はるものハ大抵之を網羅せしむべし或ハ女子の德義を缺キ品行を害するガ如きの疑ひあるハ一切除きて之を採らば

一今古の女子として其操行の觀るべきあるも此編に漏れたるものハ將さふ後編ニ於て之ヲ載せしめて其遺ヲ補はんことをあり

一此編載る所皆正記ニ據り實錄ニ徵せしものなれど多く其事實を失わざるヲ信ぜざるあり若夫文

体の雜駁より措辭の拙劣あるは固より識者の嗤笑を免れざるを知らず

一書中身を殺して仁を爲し命を棄て節を完ふまざるの類之を今日の世態より視れば事稍妥當を欠くが如きものなきをあらざれども顧みて當時の形勢と現場の情況とを把つて考一考をれむ蓋し勢の已むを得ざる所のものあつて存焉故に讀者は特其心に刑り其迹を由らばして可あり

明治十六年四月

編者 自識

朝女子立志篇卷之一

目次

- 第一 衣縫金繼の女父母の孝を盡す事_{一丁}
- 第二 福依賣の孝行並に禮儀を知る事_{二丁}
- 第三 四比信紗節操を守る事_{三丁}
- 第四 眞玉主賣夫の墓に奉事する事_{三丁}
- 第五 難波部安良賣死を誓ひ節を守る事_{四丁}
- 第六 紫式部敏慧の事_{四丁}
- 第七 和泉式部小式部内侍伊勢大輔の事_{六丁}
- 第八 清少納言才敏の事_{七丁}
- 第九 小野小町才貌兼全き事_{八丁}
- 第十 赤染右衛門顯悟の事_{九丁}

第十一 高内侍五物を愛惜たる事^{十丁}

第十二 有智内親王才學の事^{十二丁}

第十三 橘逸勢の女至孝の事^{十二丁}

第十四 上毛野形名の妻武勇の事^{十三丁}

第十五 和氣廣蟲慈心あり且友愛の情厚き事^{十四丁}

第十六 源義高の妻節を守る事^{十五丁}

第十七 松下禪尼破障を補ふ事^{十六丁}

第十八 瓜生保の母其子の死を悲ぢて深く主君を思ふ事^{十七丁}

第十九 楠氏の母其子正行を誡めたる事^{十九丁}

第二十 北條氏使者を耻ゝめたる事^{二十丁}

第二十一 小碓相節の死を思ふ事^{二十二丁}

第二十二 鎌田政家の妻節の死を思ふ事^{二十二丁}

第二十三 静義經の爲お操を守る事^{全丁}

第二十四 舞女微妙父を思ふ事^{二十四丁}

第二十五 那須五郎の母其子を勵まへ事^{二十五丁}

第二十六 山内一豊の妻夫の爲に十圓金を出して名馬を求めむる事^{二十六丁}

第二十七 鳥井與七郎の妻一歌を遺して井に投ぐる事^{二十八丁}

第二十八 原元辰の母一死して其子の忠義を勵まむ事^{二十九丁}

第二十九 安藤朴翁の妻龜女強記博覽ある事^{三十二丁}

第三十 大休了然尼豁達慧敏ある事^{三十二丁}

第三十一 井上通女氣象秀拔ある事 三十三丁

第三十二 河瀬春女婦道ある事 三十四丁

第三十三 農夫七郎右衛門の女婚を取るを拒みし事 三十五丁

第三十四 三宅尚齋の妻貞節の事 三十六丁

第三十五 綾部道弘の妻小林氏讀書を嗜む事 三十八丁

第三十六 師岡綱治の妻齊女妬忌なく義氣ある事 三十九丁

第三十七 湯淺常山の母婦道あり且人の困窮を憫むの心深き事 四十丁

第三十八 梅屋の女先見の明ある事 四十二丁

目次終

皇朝女子立志篇卷之一

櫻所 千河岸貫一 校閲

遂軒 關 徳

有竹 上野 理一 編述

第一 衣縫金繼の女父母の孝行盡す事

衣縫金繼の女は、本右京の人なれど、故ありて、河内志紀郡に居れり。十二歳の時父死去せしむ。女深く之を悲しむ。爲に食を廢するに至る。服闋りて後、母の已に嫁せんことを知り、竊に出て父の墓側に住み、朝夕號哭して聲を絶たば、母も終に感動せられて再び之を嫁せむこと、言はざれば是より母と俱に居て父の忌日に遇

ふ。こゝに厚く祭祀の禮を行ひ。少くも怠らば。又其近傍に
惠賀河といへる河あり。常に橋をきく爲ふ。冬に至れども。人
皆之を渉ることに難澁るを以て。女は母と共に年々材
木を買ひ。假橋を造りて。往來の便をはかる。おと十五年
の久しきま及び。母は八十まで没せしが。此時も痛く悲
哀を盡せり。事朝廷に聞えられ。承和八年。敕して三階ふ叙
し。終身戸田の租を免して。門閭を旌表せられけり。
有竹子曰く。孝の徳の本。教の繇て生ずる所あれば。人
子たるもの。務むべき。惟孝より大いあるものな
く。孝徳已に全き時。溪泉の源澄て。其支流亦清く。滾
々流るるが如く。自餘の百行も隨て皆觀るべきあり。

今此女の至孝ある。亡父の祭祀怠らば。且生存の母に
事へて。孝養至らざる所あり。所謂居れば則ち其敬を
致し。養へば則ち其樂を致し。疾めば則ち其憂を致し。
喪ふべし。則ち其哀を致し。祭にハ則ち其嚴を致し。五の
者備りて。然る後能く其親の事ふるとい。此女の謂ふ
まて。夫の惠賀河に假橋を架して。往來の便を謀るが
如きは。其惠の及ぶ所廣しといへども。必竟孝心の餘
波溢れて。自ら此ふ至るもの。過に聖人孝を以て徳
の本と云ふ。寔に以あるあり。

第二 福依賣の孝行並に禮儀を知らず事

薩摩民家の女に。福依賣といふものあり。父母已ふ老

いて男子なく且皆病みて牀に在りけるに福女自ら人に傭はれ少々の賃錢を得て兩親を養ひ湯藥に侍をること廿餘年の間一日の如く又民間鄙賤の家にお生長せしむるも似合はむ能く禮儀を知り父母に恭敬を蒙るの厚き頗る人を感動せしむるものあるを以て仁壽年中に爵三級を賜へり。

有竹子曰く身鄙賤の家に生れて教訓の素あるにあらず然るも猶能く父母に恭敬を蒙るの厚き此の如く孝徳の天性に存するものたるや以て見るべきあり。

第三 四比信紗節操を守り事

四比信紗大和國有智郡の人果安の妻なり果安死すふの後獨節操を守り妻の生むところと并せて八人の子を撫養し之を視ること更に彼是の別あらば舅姑に事へて能く婦の禮を盡し孝を以て郷里の稱を蒙るとあるとあり和銅七年其孝義を賞して終身租税を免さる。

有竹子曰く夫死して獨節操を守り舅姑に事へて能く婦道を執るもの猶或は在り妻腹を併せて八人の子を養ひ之を視ること一の如く彼是偏頗の事なきに至てハ世多く得易からざるが如く然るども是亦竟は孝心の結果に出るものたるを知るべし。

第四 眞玉主賣夫の墓に奉事を事

真玉王賣は、壹岐の國壹岐郡の人、年十五にして夫死せり。其後は自から誓ふて他不嫁せむ。夫の墓に奉事するや、更ふ其存生中、不異ふ。此の如きこと三十餘年。終ふ一日、怠るの色あり。寶龜四年、爵二級を賜ひ、且田租を免して、其身を終へむ。

有竹子曰く、烈女ハ二夫ヲ更へざるもの、固より貞婦の定操にして、事の賞をべきハ論を俟たば、然るに其死に事ふる也。生ふ事ふが如く、三十餘年の久きも、一て終ふ一日も怠るの色おきハ、百年凋まざるの松柏、千載朽ざる乃鐵石と、其節を齋くすべく、其烈を爭ふべし。守ふことの尤も堅くして、嚴なるものおあらざれむ。何ぞ能く此の如れを得んや。實に曠世の貞婦と謂ふべし。

第五 難波部安良賣死に誓ひ節を守る事

筑前の國、難波部安良賣といへる女子あり。其性至孝にして、父母亡せしものちも、朝夕墓所を訪りて、哀悼頗る至まり。年十六に及び、宗像大領宗形秋足に嫁し、能く夫に事へり。幾ほとなくして夫死去せり。時の人其若くして姿色あり、殊に孝貞の聞え高きを以て、争ひ之を迎ふといへども、死を誓ひ節を守りて、更に聴かぬ。郡の吏其狀を官に上伸せり。詔して田租を免さる。

有竹子曰く今の世輕薄なりて貞節の何物たるか知らば女子の年稍く算まるに及べむ早く嫁せんあはれ欲し已に嫁して不幸夫を亡へば又改めて他は適くの容易ある猶旅客の驛舎を過ぐるが如きものあり此輩宜しく安良賣の貞節を視て少しく鑒むべきあり。

第六 紫式部敏慧の事

紫式部ハ式部丞藤原爲時の女なりて右衛門權佐佐藤宣孝に嫁せり式部幼あるときより其性敏慧人の書を讀むに聞けば能く諳記して忘るることなく爲時甚だ之を愛し常に曰へるやう汝を以て男子たら

しめざるは殊に遺憾ありと年長けて和歌を善くし博く和漢の舊記に涉り兼ねて朝廷の典故に通じ此時上東門院方々文詞を好み婦人の才華あるものを選びて之を左右に置かせ式部も亦時々召出さる上東門院の自著文集を讀んとせらるるときは式部之が樂府二卷を授けたり上東門院の父道長其才色に悦び之を寵せんとせり式部固く拒きて從はず源氏物語五十四帖を著し醍醐朱雀村上の御三朝の事蹟に假託して空に架し虚に憑り一言一句皆其精妙に極めざるはあく後の人之が箋注を下して疑難を釋きしはどの名文章なま推して詞家の

宗とせらる。一條帝叡覽ありて大に之を賞し給ひ仰
せらる。よは是善く日本紀と諳熟せらるのなりと。
因て時の人は日本紀の局とて呼びける其人とあり。
婉順淑嫻。ふて自から長所ふ矜らば其謹教身を持
たるの大要は著る所の日記に見えたり。女賢子と亦
和歌を善く。狭衣物語を著はる。大宰大貳高階成章
ふ嫁し。後一條帝の乳母とある。大貳三位といへるが
即ち是あり。

有竹子曰く女子ふ貴ぶ所へ貞節ふ在て才華に在ら
ば。靜淑に在て文藻ふ在らば。假令才華の美觀るべく。
文藻の妙賞さるべきありといへども貞節の道靜淑の

徳一たび欠くれむ。其餘へ復た觀るに足らば。然れど
も古の女子は貞淑靜婉ふて才華文藻あるもの多
く。今の僅に一技一藝能くして則ち人ふ驕り己ふ
誇るもの。比ふあらざるあり。況や紫式部以下此に
列記する。閨秀の如き。文質彬彬。青史に耀き。其事往々
人口に膾炙するもの。よ於てをや。之れ世の尋常一般
女子と同日ふ論ずべからざるあり。

第七 和泉式部小式部内侍伊勢大輔の事

和泉式部へ越前の守大江雅致の女。和歌に巧みあり。
和泉守橘道貞に嫁して。女小式部誕生む。道貞没して
のち上東門院ふ仕へり。其項播磨の書寫山に居る僧

性空といへるものあり。時の人皆之を崇信せざるは
な。式部或時之に和歌を贈りて曰く「闇きよりくら
き道よぞ入りぬべき。遙く照らせ。山の端の月」と世以
て精妙とまじ。今猶人口に膾炙せり。

小式部内侍も亦上東門院に仕へ。幼少の頃より和歌
を善くしける。時の人々之を疑ひ。或は其母の潤色を
する所あらんといへり。然るに母式部は當時丹後に在
り。偶禁中に歌合の催しあり。折柄藤原定頼小
式部を斬めて云や。丹後の行李は已み着せしやと。
小式部即座不起ち口占して曰く「大江山。いくのゝ道
の遠けまだ。まど踏みとみど。天の橋立」と是より才名

大に著はる。

伊勢祭主大中臣輔親の女に伊勢大輔といへるもの
あり。是も和歌を善くし。紫式部和泉式部小式部等と
俱し其名を齊まぐ。亦上東門院に仕へり。大輔の初
めて宮に入るや。關白道長側に侍べる。時ふ偶櫻花を
獻ぐるものあり。道長筆研を大輔に授けて和歌を題
せしむ。大輔筆を執り立どころに詠じて曰く「古への
奈良の都の八重櫻。今日九重に香ひぬるゝふ」と道長
大に其敏捷に感賞せり。

有竹子曰く。當時文運の盛りに関くるや。彬々乎と
て教慧の閨秀が出し。書を讀み詞を詠ぐるもの。朝よ

野に指倭ふるに遑あらば、即ち和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔の如き、皆能く才華に富み、文藻に秀でたる、讀むものなりて、往々感嘆せしむ之を、今世に求むるも、多く得べけんや。

第八 清少納言才敏の事

清少納言は肥後守清原元輔の女として、才學の名世に高く、一條帝の時、藤原皇后お仕へて大に寵愛せらる。皇后曾て雪後、近侍の者を顧みて、香爐峯の雪は、想ふに如何あり、人と仰せらるるに、少納言は即ち起て、御簾を褰げたり。其意は唐の白居易の詩、香爐峯の雪、簾を捲て看るといへる句、お爲めに斯く

爲しけるなり。時の人皆其敏捷を賞せり。皇后も特に其才華を嘉せらまて、内侍の官に昇進せしめんとせらる。まゝに故ありて終ふ果てば、老後、零落して家に在りしが、其屋宇の破れて、貧窶の甚だしきを見、諸年少等過るごとに之を憫笑せしに、少納言は簾中より呼て曰やう、古へお駿馬の骨を買ふものさへおふな、聞かざらんと笑ふもの之を聞き大に慙て去る。少納言著はまところの枕草子に、當時盛に世に行はる。

有竹子曰く、清少納言御簾を褰くはの事、尤人口に膾炙し、以て當時の美譚とかは所あり。其才氣の高くして學力に富るや、著る所の枕草子に就ても、其一斑

祇見る不足まり然る小晩年落魄駿馬の骨を以て
少年の嘲解に至りては所謂佳人薄命あるもの小
あらむや

第九 小野小町才貌兼全き事

小野小町は其出るところの本末を審にせざといへ
ども或ハ参議篁の孫ありといふ父と良真と呼び出
羽の守たり小町絶世の姿ありて殊に和歌不長け
まば紀貫之の古今和歌集を撰べるときも多く其
歌を收め且序言に之を論じて小町の歌は衣通姫の
流れて其詞の意凄婉ふと終に氣力ふ乏しく之
を譬ふれば美人の物憂き思ひあるが如く婦人の歌

詠は自然斯くあるべきものありといへり

有竹子曰く小町の事世之祇傳ふるもの多しといへ
ども率ね俗談取るに足らば只其姿色ありて和歌に
巧みあるまとい普く人の許を所りて僧父野人婦
女小童も猶其名祇識らざるものあきハ即ち才貌兼
全く古今閨秀中多く得易からざるの人たるが故を
るか

第十 赤染右衛門顚悟の事

赤染右衛門ハ大隅守時用の女あり初め攝政道長の
妻倫子に仕へて右衛門と稱し後ハ大江匡衡に嫁を
才思あり和歌を善くし和泉式部と名を齊くせり此

頃藤原公任まことに中納言を辭せんといふ。當世の名儒紀齊名大江以言等お屬して表紙作らうとしたまふ。皆其意お稱はざるを以て更に匡衡お請ふ。匡衡承諾して家に飯りしものち何となく物憂れた色の見えけまへ。右衛門怪みて之を問ふ。匡衡告ぐるに故を以てして曰へるやう。齊名以言等の才學を以てをら猶其心に満足せしむる能はむ。況んや不才淺學我等の如き萬及ぶ所あらんやと。右衛門聞て沈思少頃して曰く。妾既お之を得たり。彼公お素より外面を飾りて人より矜るを喜ぶの性質なまへ。盛りに其門地闊闊の由來を述べ而して不幸時お遇はざるの意を微く文

中に露へんべし。然るときは必ず其意に適ふならん。と。匡衡其言の如くせし。公任果して大に悦び遂に其草衣用ゐたり。其才智の穎悟あること概ね此の如し。

有竹子曰く。妻の夫を裨けて家事を治むるは固より其分の在るとある。然るお女子の才智少く人お勝るはれむ。則ち或は柔順貞淑の道を忘えて牝雞晨を報ざるの不祥を見るに至り。否らざれむ。閨門修らばして醜聲外に聞ゆるのことあるもの世に多し。今や才智穎悟赤染右衛門の如くありて能く是等の弊を脱し。靜婉夫は事へて婦道を盡すのみならん。公麼柔

軟の一女子ありて其敏慧ハ當時の名儒をら猶且及
むざる所のものありて遂ニ夫の名望成リて齊名以
言等の下に出ざらむるものと致を今之世乃
僅に才智あれば則ち以て自から負み婦道を失ふて
省みざるものふ比をれば其優劣果して如何ぞ也
第十一 高内侍五物ヲ愛惜する事
高内侍は儀同三司藤原伊周の母あり才思ありて甚
だ詞藻を好み恒に言ふやう磨残りの餘墨四五寸
ばかり剪棄たる紙の片零鋒尖の鋭たる筆三文の孔
兄と書冊とを併せて只此五物ハ吾之を愛惜するこ
と童ノ龍宮の珍寶のみあらばと

有竹子曰く只此五物書冊ヲ除くの外ハ世の多く廢
物と棄て顧みざる所乃そのあり然も猶之ヲ愛惜
する此の如く平生の儉德以て想ふべし事ハ甚だ小
なるが如くといへども之ヲ大あるものに推さ小皆
然らざるをあく而して特ニ女子の模範たるのみ
あらば男子に在りても亦宜しく龜鑑とされべき事
たる

第十二 有智内親王才學の事

有智内親王は弘仁帝の第三女ありて幼より才學あ
り上曾て公主の邸ニ幸し園中に咲亂るる花ヲ賞し
て宴を開き給ひ群臣に命ト春日山莊といへる題小

て韻を拈り詩を賦せしめ給ひけるに、公主は時小年
十七の妙齡ふおはしおがら兼て才學ふ名を得し人
ゆゑ、即席に賦して曰く、寂々幽莊山樹裏、仙輿一降一
池塘。棲林孤鳥識春澤、隱澗寒花見日光。泉聲遶
響山、色高晴暮雨行。從此更知恩顧渥、生涯何似
帝讀で大に歎賞し給ひ、直ちに三品を授く。

有竹子曰く、之を史に徴するに、内親王至性儉素、其薨
ずるや遺言して葬儀を薄くし、且葬使を受けざら
む。時の人を之に議し、尊卑分あり、過不及皆不禮あり
や、いふものあるに至るといへども、必竟葬儀の如き
は多く華美に流れやとく、然して其華美終は毫も世

に益するものあらざれば、務めて之を薄くするを
事の宜しきに適ふものと見、是其人の平生を觀るべ
し所ありて、當時の物議の如きは、敢て取らざる
あり。

第十三 橘逸勢の女至孝の事

橘逸勢の女は其性至孝ありけるが、逸勢の罪を得て、
伊豆の國に貶竄せらるるに方り、女痛く悲しみ嘆き、
徒歩して之に従ひゆくとせし、其監護の者叱して
隨ふを許さず、女乃ち已むを得ず、晝止まりて夜行き、
遂に父と相離るるに及て、配所へ達するを得たり。逸勢
の死するに及び、其屍を収めて慰懃に之を葬り、廬を

墓側不營ふ守りて去らば自から髪を削り尼と爲り。
名を妙冲と改め誓念苦ろに至り、日夜必し懺らば
見るりの之が爲ふ涙を流せり。後又其屍を負ふて
京に還る人皆之を異とし稱して孝女と云ふ。

有竹子曰く、一心父を懷ふのあまり雨露を冒し、險阻
を避けず、必父の到る所は随ふんとするの孝思、確乎
易らば自ら鬼神を感動するに足るものあり。然るに
昊天恤れまば、父然して終に配所に死せしむるに至
るも、猶其墓に廬を結びて死者に事ふるや生者に事
ふるが如く、始終其志を改めざる、之を孝女中の孝女
といふて可なり。

第十四 上毛野形名の妻武勇の事

上毛野形名の妻は武勇あり、舒明九年形名將軍とな
りて蝦夷を討ちしが、戦ひ利あらばして兵士へ四方
に潰散せり。形名單身走りて壘に入まば、賊忽ち來り
て之を圍み、已に計の出るところなく、進退窮りて竊
に遁去んことを謀る。時は妻慨然としていへらく、今
譬ひ走るとも終に免るを得ざりて、祇に辱しめを取
らんのみ。抑も君の祖先は海内を平治して威武の名
隠さず、御方あらざるに、君は今日の難に臨み、
苟くも免む給ふときは、祖先の功烈盡く廢して、世間
の物笑ひと云ふや如何せん。とて、即ち形名に酒を飲

まゝめ其酔ひ臥るるより乗て妻親から夫の劍を佩ひ
數人の婢妾に命じて齊しく弦を鳴さしめたるに
形名と覺えを醒起きて共々兵器を取て進めば賊を
驚て猶軍衆の多きを疑ひ早々圍を解き去るなり夫より
散卒も稍く集りて遂に蝦夷を撃ち大に之を破る
ふ至りしに全く其妻の力あり。

有竹子曰く昔ハ文化未だ世に行われずして人皆武
祇尚ぶがゆゑなり。特に男子のみならず女子の武勇
も亦往々觀るべき如此もの多し。固より戰國の習ひ
自から然るものあるが如しといへども初より尚武
を以て國を立つるの遺風餘俗猶此時も存するを由

るふあらずや。後世女子の氣魄なき深窓より起卧して
中饋の事にだも猶勝へざるが如き優柔軟弱の
のといふ愛に異あるなり。

第十五 和氣廣蟲慈心あり且友愛の情厚き事

和氣廣蟲は備前藤野郡の人なり。初め從五位下葛井
戸主に嫁せしむ。其人とあり真正柔順ありて能く節
操を守るとを以て孝謙帝の爲め深く寵愛せらる
て正六位下に叙し帝の落髪し給ふふ及び廣蟲も亦
髪を薙りて法弟子とあり。名を法均と改め進守大夫
といへる尼の位に授けらる。藤原仲磨の謀反して誅
し伏せらるにおよび法均ハ帝を諫め其連累を坐して

將さふ斬罪に處せらるゝとるゝの數百人の死を
宥りて流刑とあり。曾て戰亂のち、年飢饉ありて且
疫疾の流行せしことありて、民間子を生むゝの往々
之を生育する能はざるが爲め外に棄るに至る。法均
聞て之を憫み、人を四方に發し、見當るゝのへ悉く收
めて之を養はしめ、凡そ八十三兒を得たまふ。皆養子
と稱して、姓を葛木首と賜ひ、厚く存恤せり。弟清磨が
予削道鏡の意を忤ひて、流竄に遭ふに至り、法均も亦
前後に流さる。光仁帝の寶祚を踐せ給ふにおよび、ま
た召還されたり。帝或時法均の事を嘆賞して仰せら
るやう。朕が左右に在るものは、常々各人を毀譽する

こと多しと雖ども、法均のみは獨り人の短所を言は
ざる。而して法均は平生友愛の情厚く、姉弟の間は財
物を分たざりし。尤も其及びがたき所にて、時の
人之を稱せざるのを、没するに臨み、弟清磨に屬
して曰く、凡そ百の追福は、一も須る所なく、惟二三
の僧徒と禮懺を修め、後世子孫をして長く準則たら
しめよと。

有竹子曰く、真正柔順の婦人の美德あり。苟も此徳あ
れど、百の爲を所皆其道を得ざるへあり。夫の帝は諫
めて仲磨の連累數百人の死を宥るが如き、貧家の棄
子を養ふて之を存恤するが如き、佛門普愛の慈悲心

は出るものといふといへども、之を推せば即ち真正
柔順の徳は基づくものなり。あらば其友愛
の情平生に厚く、且人の短を言ひざるが如き。尤も
人のおよびがたき所に於て其徳の美行の善、以て知
るべきあり。

第十六 源義高の妻節を守る事

源義高の妻源氏ハ頼朝の女にして、義高の鎌倉に質
とありしとき、頼朝之に妻はせしあり。義高の父義仲
の謀反して誅せらるるに、および頼朝ハ義高をも併
せて之を殺さんとせしに、源氏ハ早く其計をさと、
義高に勸めて遁去らしめんとする途中に於て、終小

追斬せられ、源氏深く悲慟して、食を廢するに至
りしが、母北條氏見て之を憂ひ、痛く頼朝に尤めけし
は、頼朝も已むを得ざりて、罪を追ふもの小歸して之
を斬り、以て其意を慰め、更に之を外甥藤原高保に嫁
せんとせし。源氏固く誓ふて適かど、遂小憂を以て
死せり。

有竹子曰く、家に在てハ父に従ひ、人よ適てハ夫よ従
ひ、夫死してハ子よ従ふは、婦人三従の道なり。今源氏
人倫の變に際し、夫ハ父の爲めよ害せられ、身ハ再び
他よ嫁せしめられんとするの不幸に至るも、固く誓
ふて節を改めど、終に憂鬱して其命を殞るの心中、實

朝三ノ二ノ多
に憫むべし。抑も戰國倥傯の時、在て道義地を掃ひ、
人倫迹を絶ち、臣其君を弑するものあり。子其父を弑
するものあり。何ぞ況人や其他をや。源氏の不幸、又遭
遇するが如きの事。率ね當時の常として、更に怪むお
足らば、只其死を以て節を守り、鐵石啗あらざるの志
を所謂空谷の足音、多く無くして、僅に有るものなれ
ば、特に之を旌表せざるを得ざるあり。

第十七 松下禪尼破障を補ふ事

北條時頼の母安達氏、松下禪尼と稱せり。或日時頼を
招かんとして、禪尼自りら其支度を調へる處へ、偶兄
の義景來り、時に禪尼の手、小紙を裁ちて破障を

補ひける。義景之を見て、斯る面倒あること、お手下
さまよりい、寧ろ人お命トて盡く之を張換へしむ
まば、勞も省け且新らしくありてよかるべしと申せ
しに、禪尼へ答へて、吾も之を知らざるおはあらざれ
ど、凡そ物は少しく破るの時に於て之を補へば、遂
にお大破に至らざるの意を、兒輩お知らしめんが爲め
に、面倒をも省みざして、斯く爲せり。次第ありといは
れりまば、義景も答ふる辭なく、赤面して立去りけり。
有竹子曰く、物の未だ大破に至らざるの時に於て之
を補へむ、遂に大破に至らざるの一語、千古不易の金
言と謂ふべし。凡そ小にして一事一物、大にして天下

朝三ノ志 卷一
の事を料理する皆之を其初に注意をれむ以て補綴
すべからざるものあり時頼執權の職は在て民心稍
服し大に施政の道を誤るに至らざりしも全く家庭
の訓然らむむるにあらずや

第十八 瓜生保の母其子の死を悲むて深く主
君と思ふ事

延元の頃瓜生保其弟義鑑源琳照等と脇屋義治を奉
ト里見時成を大將として杣山城に據り以て遥に官
軍の聲援を爲せり時に敵の將高師泰軍兵を敦賀に
出せ保弟義鑑等と里見は從ひ之を途に要へて大
に戦ひけるに運弱くして里見はト保義鑑あらび

に其姪七郎とも終に討死を遂けたり源琳照等稍く
殘兵を收めて杣山城に歸りて此時軍士の死亡頗
る多きを以て號哭の聲は城中に滿ち聞くも哀まの
ありさまありける然るに保の母のみ獨驚く色あく
義治の前に出て曰やう兒輩の不力あるが爲終に里
見公をして淺猿にき戦没を遂げしめ大に郎君の心
を傷めんことな恐る然れども幸ひして保叔姪三
人は首を駢べて里見公の爲に死したまへば以て少
く謝すべき所あり元より兒輩の事を起せし郎君
の爲に謀るゝころゆゑ敵を平らぐふ於ては百千の
子姪を戦死せしむるゝも更に悔ゆべきことにあら

朝三子志緒
ど。死んや今度二子の死をふ。猶三子のおるをや。是
ふ依て再舉を期するに足るべきを思ひ。以て妾の大
に哀まざる所あり。とて。自から起ち。義治に酒を。い
かゝま。ば。列座の諸士。いづも。爲に勵され。憂を忘。も
色。を。作。して。皆。自。から。奮。は。ん。と。思。へ。り。

有竹子曰く。親の子を思ふ。天倫あり。之が戦場。に臨
みて。終。は。敢。ま。き。戦。死。を。遂。ぐる。を。見。更。に。愁。傷。の。色。あ
き。い。豈。人。の。情。あらんや。然れども。此時。保。の。母。に。獨。り
主。家。を。思。ふ。の。深。き。苟。く。も。主。家。に。益。ま。る。所。あれば。百
千。の。子。弟。を。殺。さ。し。も。敢。へ。て。悔。ひ。を。い。ふ。が。如。き。い。
其。忠。義。の。精。神。凜。然。霜。雪。を。凌。ぎ。有。髯。男。子。も。殆。ど。及。ぶ

べからざるものあり。夫れ親の子を思ふ。て常の事な
り。或へ其時と處とに依りて。親子の至情を棄て。義
の在るところは従わざるを得ず。是れ深く子を思ふゆ
ゑん。う。て。保。の。母。の。如。き。即。ち。是。あり。其。人。の。爲。め。は。
他。の。諸。士。ま。で。が。併。せて。義。に。勵。ま。さ。る。に。至。り。て。は。
尤。も。感。賞。を。べき。と。あ。ら。む。や。

第十九 楠氏の母其子正行を誠めたる事

楠正成の妻は方畧貞操比類なき賢婦なり。正成の足
利尊氏を兵庫に拒ぐや。子正行稍く十一歳の幼童な
れど。亦同く従ふて軍中に在り。正成は此度の戦ひ
ふ必死を期し。櫻井驛より正行を河内へ還へし。且誠

めて云やう。吾聞く獅子の子を生むや。三日――て之を千仞の絶壑に擠して其力を試むると。今汝の年已二十歳に越えたり。心あらば能く吾が一言を記せ。此度の戦實に天下安危の分る所なれば。我まゝ生て再び汝を見るべからず。我死せば天下に終に尊氏の掌握を飯さべし。其時一當りて汝は殘兵を收めて金剛山を保ち。之が爲め譬ひ一命を捨るとも。決して敵に降伏し。吾家の聲譽を墜さば如き。未練の舉動な爲を勿き。汝の孝行は是れ過ぐるものありして。帝の賜ひしところの名刀を記念に與へて訣とし。果して正成は湊川に於て戦没を遂げなれば。尊氏其忠節に感

て。首を河内に送り。正行之衣を見て悲嘆のあまり父の授くる所の刀を抜き自殺せんとせり。母驚き之を止めて云ふやう。父の汝を還せし。其亡きあとを弔はせんが爲めあらば。汝を――て再び勤王の兵を擧げて賊徒を除かしめんが爲なり。汝其遺言を奉じて歸り。吾に告ぐ。――ハ猶吾耳の底に存せり。然るに汝ハ早く之を忘れたるや。斯くてハ終に君の御用不立つべからばとて。其刀を奪ひ。――て。正行に大に感悟し。竟に奮て賊を討ち。讐を復へるを以て事とあまふ至り――ハ。皆其母が訓誨の力に由り。

有竹子曰く。王室式微。南風振るざるの時。一當り。僅に

楠氏の父子ありて、暫く頼瀾を挽回し、傾厦を支持するを得たるの功勲を、今敢て喋々をるに須ひを。然れども其之を以て然らざるものへ、此婦の計畫與つて大に力ありと人、瓜生保の母と其事蹟へ異なれども、其志の在る所を一あり。

第二十 北條氏使者が耻しめたる事

源頼朝富士野に獵せし時、世子頼家年八歳、從ふて鹿を射留めけしに、頼朝大に喜び、急ぎ梶原景高を鎌倉に還して、之を夫人北條氏に告げしむ。然るに夫人は更に喜べる色なく、良久していへらく、將家の子に、て原野の鹿を射留むるは、固より尋常の事何ぞ殊更

ふ使者が勞するに及ばんやと、景高大に慙て退く。

有竹子曰く、北條氏の事、世之を議するもの多しといへども、到底一個の女丈夫たるを失ふは、今將家の子にして、原野の鹿を射留むるは、尋常の事たりといふの一言に至ては、殊に人意の表は出で、獨り使者景高の大に慙るのみならず、頼朝にして汗顔せむべく、而して其尋常婦人にあらずの一端を見るに足まり。

第廿一 小宰相節を死する事

小宰相は刑部藤原憲方の女にして、風貌頗る艶美あり。初め上西門院に仕へ、後に平通盛の次室となりし。

が平氏の敗れて西へ奔るや、小宰相も亦從ひ行なり。壽永の年一谷の軍潰へて、平氏の一門倉皇狼狽し海へ浮びて走るにかよび、東兵の爲め擒とあり。又は殺さるゝもの頗る多く、通盛の存亡も終に如何ありやを知るべからざるの時ふ方り。偶舟中の人來りいへらく、三位君も亦敢ふき最期を遂けられたりと。小宰相之を聞きて大に慟哭し、遂に水に投じて死す。

有竹子曰く、苟くも死すべき時あり、又苟くも生くべからざるあり。死すべきの時ありて生くれむ卑怯なれば、生くべきの時ありて死をれむ速きに失ふ。故に只其義の在る所を從ふのみ、是之を婦人の貞節といふ。

第廿二 鎌田政家の妻節は死する事

鎌田政家の妻は内海莊司長田忠致の女なり。平治元年源義朝の兵敗して將う關東に走らんとするや、其路次尾張の野間に抵り、忠致の家へ投ぜしに、忠致は政家と女婿の間柄を以て、元より平氏に黨を有とて、竟に義朝及び政家を殺せり。妻變を聞て直に其死處に至り、哀慕悲慟し、遂に政家の又伏して死す。

有竹子曰く、是亦小宰相の事と同く、時の不幸なれば、勢の已むを得ざる所ありて、終に其節操を全くす。

朝一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

といふて可あり。

第廿三 靜義經の爲に操を守る事

源義經の妻靜ハ元都下の白拍子あり。義經の京師を去るに及び隨ふて吉野山に匿る。山僧之を攻めんとを。義經靜に金寶を賜ふて別と雜色を以て護送せむ。雜色等途に金寶を奪ひ靜を棄て去る。山僧捕へて京師に送る。北條時政狀を具して之を報ぜしに。賴朝即ち鎌倉に召致さしめ。義經の所在を審問せしども靜固く知らざと陳ぶ。然るに猶其姪むことあるを以て之を留む。一日賴朝の妻政子靜の歌舞を善くするを聞き召して之を觀んとせし。靜疾く稱して應ぜ

ど。然るに政子ハ猶頻りて請ふて止まば。既して賴朝政子と鶴岡社に詣り。又靜を召して之を強ふる再三。及ぶを以て。已を得て起て舞ひ。吉野山の歌を唱へ。次ハ賤也賤の曲と歌ひ。ハ。嚴態絶妙。衆皆感愴せざる。賴朝獨懌ひ。曰く。今日神前ハ歌舞を奏せれば。まさに關東萬歳と頌すべきに。反つて叛人たる義經を慕ひ。離別の曲を歌ふ。何ぞやと。政子中にお立ちて之を慰し。今彼義經の恩を慕ふ。即ち貞女の操を守るの情中。お動て外ハ形はるゝもの。よて人の妻妾たるものは。斯くなくてはならざる。所以の理を説き。お依り。賴朝も稍く理會して。衣を簾外ハ推

一以て纏頭とあり。之を與ふ。靜僑舎ふ歸り。のち、工藤祐經、梶原景茂等就て飲燕を。時、小景茂醉に乗。ト、微辭と以て靜を挑み。る。ふ。靜顔と正。く。て曰く。豫州は鑊倉公の親弟。我は即ち其侍妾。卿は即ち其家人。ふ。あらむや。豫州。ト。て若在。む。バ。卿等我を見んと。をふ。と。固より得べから。ざる。あり。と。景茂大に愧ぢて復た一言あり。靜後。ふ。男子を分婉せ。が。頼朝命。ト。て之を由比濱。ふ。棄。め。靜を京師に放ち還。を。政子憫みて之を遣り賜賚。する。所頗る多。し。

有竹子曰く。靜ハ區々の白拍子あり。義經の妾あり。敢て取る所。ある。もの。よ。あら。ば。然るに能く其節を守り。

當時源右府の赫々たる威權を以て。を。ら。猶容易。ふ。其意の如く。あ。さ。し。む。る。を得。む。之。ハ。一母三兒の爲ありといふ。又口實を藉りて。仇家の箕箒を奉。ざる。ものに比すれど。其優劣果して如何ぞや。

第廿四 舞女微妙父叔思ふ事

舞女微妙と呼べるものは。本京師良家の子あり。が。志ざ。ま。こと。あり。て。鑊倉。ふ。下。まり。一日頼家比企能員の家。ふ。就きて宴會を開く。微妙其席。ふ。召。されて舞を奏。ける。に。態度妙絶。し。て。觀る。もの。稱嘆せ。ざる。ハ。あく。大。に。頼家の心。ふ。適。へり。能員ハ兼て微妙の志ざ。を。所。と。知り。々。ん。此女の遙々京都より來。ま。る。ハ。定め

心は訴へんとするの事あるが爲あるべしと白し
けまば、頼家親しく召して、其由を問はまうに、微妙兩
眼み涙を流して答ふるやう。妾が父は右兵衛尉爲成
と申せう。建久年中人の讒言より罪を得て蝦夷
に流され、母も之が爲め終に憂ひを以て死せり。時
妾の年七歳より、更に更親戚の頼るべきなく、不幸の
中、沈淪し、年の漸く長むるに随ひ、父を慕ふの心は
益々切まきども、其消息を聞くに由なきを以て、已を
得ず此賤業を執り、多くの人に逢ふかおは、或は父
の在處を聞くの道やあらんと思ふの外に復た願ふ
の事といへさふらはむと、頼家聞て之を憫み、直ち

使を陸奥に遣りて搜索せしむるに爲成は已に配所
に在て病死せりとの返事ありまば、微妙大に慟哭
して幾んど絶んとするに至り、遂に髪を薙りて尼と
あり、名を持運と改む。頼家の母政子深く其孝志を感
して殊に之を憐み、居宅を授けて其素懷を遂げしめ
らるる。

有竹子曰く、微妙の事ハ決して人の模範とすべき
はあらば、然れども其父を慕ふの心一日も忘るゝお
となく、百方策究して此賤業を執るに至り、幸ひし
て稍く父の居處を知るを得、續ひて其配所は病死し
たるを聞くに及び、落髪して身を世外に捨て、始終其

志は完ふせし。頗る感賞するは足るものあり。

第廿五 那須五郎の母其子を勵まし事

足利尊氏の臣下に那須五郎といへるものあり。是は源平の時代、名を得たる那須與一宗高の末葉なり。曾て尊氏の庶子直冬ちくふゆの父に叛きて陣を東寺に張る。方り五郎は其討手に向ひし。敵勢頗る強く、竟お抗をべからざることを覺りし人。書を古郷なる老母の許に馳せ、此度の役お討死せんと覺悟をまよど。獨母氏の後に残りて長く悲嘆せらるることの忍びかぬるよしと言贈りし。老母は涙と共に縷々の返書を寄せて曰く、古より今に至り、武人の家お生る

か。ハ。皆。義。を。守。り。て。忠。を。專。ら。し。名。を。惜。み。て。命。を。お。ま。ば。人。孰。か。妻。子。の。生。離。を。慕。ひ。父。母。の。訣。別。を。悲。ま。ざ。ら。ん。や。左。も。ど。家。の。名。を。思。ひ。世。の。嘲。を。耻。る。に。こ。そ。惜。む。べ。き。命。を。も。塵。芥。の。如。く。お。捨。る。ふ。も。身。體。髪。膚。を。我。お。受。り。て。毀。ひ。傷。ら。ざ。れ。ば。孝。已。お。顯。は。れ。ぬ。又。身。を。立。て。道。を。行。ひ。名。を。後。の。世。お。揚。げ。ん。は。是。孝。の。終。お。ふ。べ。し。此。度。の。役。お。は。必。ず。身。を。棄。て。力。を。勵。ま。し。て。先。祖。の。名。を。お。揚。げ。ん。と。祈。る。の。外。お。し。是。ハ。元。暦。の。昔。曩。祖。與。一。殿。の。八。島。の。軍。お。扇。轂。を。射。て。名。を。揚。ら。ま。し。時。の。遺。物。な。り。と。て。薄。紅。梅。の。母。衣。絹。を。錦。の。囊。に。包。み。贈。り。たり。五。郎。ハ。大。お。老。母。の。義。お。勵。ま。さ。し。て。愈。々。

勇氣を鼓し終ふ潔く戦死を遂げたるが爲め敵兵も
是より稍其勢を挫がまけり。

有竹子曰く戦國倥傯の間多く這等賢秀の婦人を出
る其子五郎を戒むるの語懇々切々至らざるこゝろ
あり之が瓜生楠の兩母に比するも敢て劣らざるま
り。

第廿六 山内一豊の妻夫の爲に十圓金を出して
名馬を求めしむる事

山内一豊の始て織田信長に事ふるや或時東國第一
の駿馬ありとて安土城下に牽來り賣らんとするもの
あり織田家の士之を見るに無雙の良馬かと思ひ價の

貴きふ由り求むる人あくくして空しく牽歸らんとし
一豊も深く此馬を望けども力及ばず家へ歸りての
ち猶大に思ふ所あるもの如し妻怪しみて之を問ふ
一豊之が故を語り世ふへ身貧しきほど口惜しきこ
とのあらと我奉仕の初に於て天晴斯る名馬に跨り
信長公の前に出づべきものと云ひしを妻は熟々
聞て其價の幾何ありやと問ふ黄金十兩ありと答ふ
と妻乃ち其馬を求め賜へ妻其料を辨むべしとい
ひつゝ鏡の底より十兩の金を出して與へし一豊
大に驚き之が出處を訊きしを妻は微笑して左
を怪しみて賜ひし是は妾の此家へ嫁するに方り父此

鏡の底に入きて戒め賜ふやう決して無用の事に費
を勿き汝が良人の一大事とあらんとき用の備へ
よと左まバ家の貧窶ある世の常なまバ耐忍して
過ぎぬべし養まバ今度京都にて馬揃の舉あるべ
し此時こそ君の名馬に御して立出賜へば奉仕の
初大他日立身の基たらん良人の一大事とは是か
人ぬまと思ふ小由て然せりなりと聞て一豊悦ぶこ
と限なく頓て其馬を求めけり程なく京都にて馬揃
のありし時お乗て出たりしうば信長大に驚き事の
由を聞きて益感下す矢とる身の嗜ハ斯あるべしと
て直に五百石の禄を加へ是より次第に用ひらる

の階梯をふたり其のち石田三成の兵を起さず此
夫人書を以て笠の糾とふし使を馳せて一豊に告ぐ
一豊之を得て解かばて家康に獻じたり他日立佐
國二十四萬石の領主となりしも亦此夫人の裨補せ
し力多き小居まり

有竹子曰く此事已に世の人口は膾炙し以て千古の
美譚とふれとあるあり凡そ婦人の常は儉にして家
を治め夫を奉事するの道は他を求むるを要せず此
一豊の妻の心は標準とありて可なり

第廿七 鳥井與七郎の妻一歌を遺して井に投ぐ
事

浅倉義景の臣ふ鳥井與七郎といふものあり。妻ハ河合安藝守の妹あり。嫁して未だ半年あらばして。浅倉義景ハ織田信長と戦をけぐ。浅見對馬守の變心ふ依り。浅倉の軍屢敗。與七郎等三千餘騎首を駢べて皆戦死せり。浅倉式部大輔は主君義景を斬りて。信長は降り。織田の軍卒山田城ふ入り。頗る亂暴を極め。時々時ふ與七郎の妻年稍く十七八ありて。姿容殊ふ美はかり。とて。軍卒等捕へて之を戯し。に妻涙を流して曰く。妾が父と夫は皆刀根山の城。て戦死。母と姉ハ所々ふ離散して往く所を知らず。想ふに我身の事を。痛く案じ。賜ふらめ。せめては露の命のかゝるあり。さま。疾風の便ふ傳へおくらん。ふ届け給はらば。此上なき御恩あり。其上よて如何様ふ。仰せに隨ひまゐらん。とて。筆硯を借受け。一通の書を認め。了るや否。直に傍ある古井ふ身。投せり。軍卒等之を見て驚き。急ふ援上げたれど。事已ふ及ばず。乃ち書遺したる一書を披き見。とて。其末ふ左の歌を書せり。世ふふ。とて。よ。あき雲ぞおほふらん。いざ入りてま。やまの端の月と。軍卒等之を讀み。い。う。ふ。猛き武夫の心。と。爲に挫が。とて。覺へど悲涙を催。其貞烈の至。とて。感ぜざるものありたり。

有竹子曰く。父ハ昨日尸を原野に暴ら。夫ハ今日命

矢鋒鏑は落をもの。是戰國の世の常あり。此間も當り
其子たるもの妻たるもの身を處するの道の甚だ難
き蓋言ふべからざるものありて之を太平無事の
時と同日に論まべうらざるは固よりあれど。徒らに
策究して死するのみを以て其道を處するの宜しき
を得るものとい謂ふべうらば。只其時を處とに依り
おれを處するの道如何哉考ふるのみ。

第廿八 原元辰の母一死以て其子の忠義を勵ま
る事

赤穂四十七士中の一人原元辰は兼て密に大石良雄
等と謀る所ありき。或時大石より急使の來るに

附將不赤穂を發して京都に趣かんとするに方り。何
氣なく母に向ひ。今度京都へ上り都合お依ては江都
へ行人も測りがたきとを陳べけるに。母は早く其
意の在る所を知り。元辰へ向ひて我想ふは江都へ行
けば再び歸るの期なく。親子永き訣ともあるべし。武
士は主君の爲に一命を捨ることは常ながら。隨分身
を堅固にして其志を達さべし。必ぎ未練の衝をおれ
勿きと。深く包み。密事を意外に説破せられて。元辰
も今へ詮方なく。事の次第を語り。只心かゝりは御老
体にて。不肖の亡くなり。のち誰か托して養護せし
めん。是のみ嘆かむ。く存ざるありといひつゝ。涙を

落しぬまば、母大に怒りて、忠孝ハ兩をぐ、全からむ。今日主君の仇を報せんといふ、その時ふ當り、何ぞ老婆一人の故を以て此一大事を誤るべけんや。速に去て行くべしと母の言に勵まされて、元辰も深く今生の別を惜みつゝ、心を決して京都に上りぬまば、偶大石は病牀に在りて、急に發足のほども見えず、數日滯留するうち、又母を思ふの情切ふ發して堪へられぬまば、此趣を大石に告げ、再び返りて母の安否を訪ひしむ。母默然として甚だ不興の色あり、其夜元辰と相對して酒を酌み、元辰の醉臥するに及びて、母ハ一通の書を読み、中ふ我一身の爲ふ主君の大事ハ遺して、先祖

の名を汚さるべきか由り、我先自殺して、汝が志を固からしめんとの事を陳べて自殺せり。元辰ハ翌朝ふ至り、始めて之を知り、悲嘆言ふべからば、是に由り一層奮激して、心膽鐵石の如くふなり。終に主君の仇を報じて、名を天下後世に顯はるに至り。

有竹子曰く、男と女とを問ふは、特は身を殺すのみを以て、其貞節とあるものに非ざれば、必は事の已むを得ざるの外に、是等の跡を學ぶべからば、宜しく其志の在る所を師表とすべきあり。

第廿九 安藤朴翁の妻龜女強記博覽ある事

丹波桑田郡山田某の子龜女、幼より敏警の聞へあり。

父某連歌を能く。愛宕山の興意法師宇都谷の圓立法師と名を齊く。せしほどの人あり。が龜女之に隨ひ和歌を學び。旦織紐縫裁の事に至るまで心を盡さざるはあり。此時安藤朴翁といへる人の母河合氏婦徳あり。龜女の名を聞き聘し取りて朴翁に配せし。翁も亦學を好み和歌を能く。一家和合琴瑟相諧へり。殊に龜女の強記博覽あるや。古歌を諳記する。こと三千首にあまり。常に禁掖に出入して屢御歌の宴に侍。後水尾天皇明正天皇の寵遇を受くること大に渥く。呼ぶに今式部の名を以てせらる。に至り。其死するに及び。長子爲實遺歌を編輯して一集とな

中院大納言通茂之に題して今式部集と曰へり。亦以て當時の崇尚せらる。一端を見るべきあり。有竹子曰く。古者男女の族各徳を擇び。財を以て禮と爲さば。故に司馬溫公言へるあり。曰く。凡て婚姻を議するは。先づ其婚と婦との性行および家法如何を察すべし。苟くも其富貴を慕ふと勿れ。婚苟くも賢なれば。今貧賤と雖も。安んぞ異時富貴あらざるを知らんや。苟くも不肖なれば。今富盛なりといへども。安んぞ異時貧賤あらざるを知らんやと。然るに近世の俗を觀るに。婚娶するもの皆其財を擇びて。更其徳を問ふべし。是を以て閨門修らば。家道爲は衰頽する

ものあり琴瑟諧まば、夫妻遂に反目をるものなり。澆
季の世態洵は嘆むべきものな。今河合氏の婦徳ある能
く其子の爲めに賢女を娶り、龜女も亦其歸をる所を
得、才子佳人の遭遇遺憾なきものと謂ふべし。

第三十 大休了然尼豁達慧敏ある事

大休了然尼名は総別不知真と稱し、父を葛山内記と
曰ふ。武田晴信の曾孫あり。了然少き時東福門院皇后
に奉仕せしが、皇后崩御の後歸りて江都に居り。武田
壽菴の妻となり。二子を生む。然るに兼て出家の志あ
るを以て、壽菴の爲に妾を買ふて之に與へ、身は去て
駒籠の白鷗に謁して弟子となりしが、元より天資の

豁達にして才辨あるを以て、妙に禪機を得、能く之に
及ぶものゝあらざるなり。又詩歌を善くし、書を能く
し、名も當時に知られ、武州落合村泰雲寺及び蓮乗院
に住み、中興の開山とをまじり、年六十六にして寂を。其
辭世の詩に曰く、六十六年秋已久、凜々月色向人明。莫
言那裏工夫事、耳熟松杉風外聲。子葛山重藏、尾張侯の
儒臣と爲る。亦了然尼薰陶の及ぶ所あり。

有竹子曰く、了然尼の身を佛門は皈せりや、聊り爲め
るをる所あつて然るものなれむ。敢て之を咎めむ。猶
其志の在る所ハ、一篇辭世の詩中に見え、豁達の性慧
敏の才亦其尋常の人なあらざるを知らるべきあり。

第三十一 井上通女氣象秀拔ある事

井上通ハ讃岐丸龜士人の女なり。生じて夙慧を具へ、能く書を読み詩歌を作る。年十八にして丸龜侯の太夫人の侍。従ふて江都にゆき、時東海紀行を著し、九年を経て後歸る時、又歸家日記を作る。嘗て盤珪和尚と儒佛の道を論辨し、爲ふ和歌を作り、其志を述べて曰く、「つねにゆく道をまよはさず、よけうみの海士の、りたる舟も頼まぬ。其意へ人は當さふゆくべきの道あり、必ざりて佛力を假るに及ばざる言ふなり。其氣象の秀拔あること、率ね斯の如く、識者皆之を稱せり。

有竹子曰く、通女秀拔の氣象へ、已よ一首の歌中より於て見るべく、柔軟の婦女として、能く是等の卓見を持ち、男子も亦愧るとある多し。

第三十二 河瀬春女婦道ある事

河瀬春は江都の人、父を外記といふ。五歳の時母を喪ひ、後母に事ふること一、所生の如く、孝順至らざる所なきを以て、大に其懽心を得たり。が、幾くもなくして後母死せり。春をふはち諸孤を養育し、家事を幹理する、皆其宜しきを得、頗る感ずる不足るものあり。後に稻生恒軒に嫁し、之に事ふる終始敬慎を主とし、謙遜自から卑うして、克く婦道を盡し、家をおさむる

や。専ら儉素を主とし。事苟くも人不利あれば。必も其力を竭し。婢僕を使役するにハ悉く恩意を加へ。其上ハ婦功を善くし。裁縫の事ハ一切之を人に委ね。書問の往復貨器の贈遺。及び一器を造り一衣を製する。小至るまで。悉く帳簿を設けて之を記注し。敢て少くも失ふことあらば。又常に儒道を崇信して。深く朱子の小學を好み。婦の道は残らば。此書ハ具はむ。りて。日ハ之を以て子弟を教訓し。書を讀み行を勵さし。其平生に交はる所のもの。賢ふりと聞かば。乃ち喜び。爲に寢食を忘る。に至り。又舅姑ハ事ふる甚厚く。舅姑の大阪に在るや。屢江都より書翰を寄せて

起居を問へり。後ハ舅の歿するに及び。姑ハ事ふること期年。奉養最も至り。早く實母を喪ひ。詳かハ其事を知らぬ。およぶざるを以て。乃ち之を人に問ひて。其世系及び性行内治の大概を知るを得。録して七冊と。父。母。舅。姑ハ事へ身を脩め。家を理む。の道ハ至るまで。皆此中に具はらば。歿するに臨み。子妹ハ遺書の數通あり。いづれハ身ヲ脩め。家を齊ふるの大要を述べて。親切懇到讀者をして。爲ハ感泣せしむる。小至る。

有竹子曰く。俚言ハ言ハむや。父母の膝を教の机ありと。凡そ子の賢とあり。愚とあるものハ。皆家庭教育の

如何又因らるゝあり。然るに近世女子の教ふき一旦人に適きて母たるに及ぶも、子に教育するの方を知らざるがゆへ、特は舐犢の愛に溺れて、才氣の發達を抑え、務めて之を愚に誘くが如きの有りさまなきにあらば、是等愚昧の母も、此河瀬氏を視て、大に省察せらるゝとあるあれ。

第三十三 農夫七郎右衛門の女婚を取るに拒み
去事

備前兒島郡小串村の農夫七郎右衛門あるもの一人の女子あり、然るども家貧くして之を養ふこと能はざるが爲め、幼少の時より出て人家の婢とあり

後、期満ちて家に歸るべし。父は年已不老ひ、母は繼母なれども、次第に衰弱し、老たる兩親の頼みとあるところは、此女あるばかりなり。なれば、親族相謀りて婚を取り、父母を養はしめんとせしに、女は聴かずして、いふやうに人の心は測りがたきものなり。若し我夫となる人、父母に對するこのあからんふへ、我獨親に安んぜんとするとも、必し心おまかせぬことの多からん。其時、不臨みて悔るとも、甲斐なきことなり。覺束あきはかり、ことハ爲さざるを以て勝まりしを我女子たりといへども、二人の親を養ふばかりに何の難きことやらんとて、自から耕し、耘りたり。人

猶強ふるに婚の事を以てをれば、頭を掉ふて顧みば、只朝夕父母の心を安んずるの外に、餘念あらざりしと。

有竹子曰く、男子妻を娶りて孝志弛み、女子婚を取りて奉養衰あるもの、世數あるに違あらば、此女の親族の言を用ひざるや、其意甚だ深く、即ち孝子至情の存ざる所も此に在るなり。

第三十四 三宅尚齋の妻貞節の事

三宅尚齋の武州忍小幽囚せらるるに方り、其妻田代氏小託するに老母及び二人の子を以てし、而して黄金廿兩を與へ、之が奉養の資となすにめたり。田代氏

自から念ふ、夫は圜圖の中に囚はれて無量の艱辛と嘗め、憂苦至らざる所なきに、其妻子たるものが飽食暖衣晏然として起居をふし、情ふ於て爲むに忍びざる、ところありとて、是より嚴冬祈寒の時、小縕袍を穿たむ、盛夏三伏の候、小蚊帳を張らば、老母に奉養をふの暇ふへ、人の爲に縫裁又ハ洗濯をして若干の賃錢を得之を以て一家の生計を補ひ、此の如くあること三年、尚齋より托するところの廿金ハ絲毫も費さざりて、尚齋の放免小遭ふ不及、乃ち其金を出して之を還せしに、尚齋少く怒まる色ありて曰へるやう、元此金を汝小與へしハ、老母に奉養を盡さし

朝三暮四多事一
めんが爲めあり。然るに今此の如くなまば必らば其奉養の道に於て至らざる所ありあるべし。田代氏之を聞き徐に語る。ふ三年間夫に代りて姑を養ひ次第を以て。而して此金を糜きつり。乃ち豫め君が今日の用不備ふありといへば尚齋も深く其貞節を感賞せり。

有竹子曰く。女子纖弱の手を以て。自から勞作し。一家四人の口を糊して。能く三年の久しきを支え。終に飢餓せざるのみならん。老母の奉養備さる至り。猶又夫の付托したる廿圓の金を存し。絲毫も費さざり。が如き。豈多く得べき人ならんや。此夫よりして此妻あり。閨門整肅琴瑟和諧の狀想ふ可し。

第三十五 綾部道弘の妻小林氏讀書を嗜む事

綾部道弘の妻小林氏は幼より稍詩文に通じ。義理を曉り。人を愛し。物を憐むの心深く。平生花卉を好み。禽鳥を喜べども。之を籠中に養ふことを欲せば。其庭園の樹間不多く馴れ集まるものな指して曰く。此吾籠中の物なりと。又能く母に事へて奉養怠らば。親族に厚くして貧困のものおむ。屢衣糧を給して撫字に至らざる所あり。曾て二客あり。其家不寄寓せしが。小林氏之を待遇せんこと數年の久しき。遂に倦む色のあらざる。二客深く其恩に服せり。後不中風を病み

屈伸自由ふらざるを以て、其子安正を召し日に膝下に侍りて經史を讀ましめ、二女子も亦側ふ在りて古詩文および國事小説を誦るを聴き以て之を娛み、客の來り談ざるにあまば、經史を説き時事を談して、晷の移るをも覺へざるに至る。病ふ在ふことの久しといへども精神少くも亂るべからず、恬靜無爲あり。正徳元年、歳六十三にして歿せり。

有竹子曰く、女子の胸界元狹小あり、故に人を愛し物を憐むの情甚だ薄し。間々然らざるものあるも、或は其道を得ざるもの多し。今小林氏の人を愛して姑息に流るる物を憐みて其道を得、禽鳥も其徳は馴を寄

客も其恩は服するが如きは、其人性質の美は由るといへども、一は讀書義理を曉るの功は在らざるべからず。誰か讀書を以て、女子に緊要あらばと謂ふものぞ。

第三十六 師岡綱治の妻宵女妬忌なく義氣ある事

水戸の世臣師岡綱治の妻宵女、貞靜として殊に姿色あり。下を御するに恩を以て、内治太だ整へり。男綱常といへるは、家婢の生む所をむど、宵女取りて之を育ふこと吾子の如く、以て成立むるに至り、厚く其母を遇し、周旋して之を外に嫁し、更に一婢を擇ひて、夫の枕席に侍せしめ、平生之ふ百の女事を教へ、慙慙と至らざる所なく、毫も妬忌の情を胸中に入介すること。

のあゝざるを以て。閨門能く和睦し終始離間の言を聞かざり。曾て其臣某宵女の容色に懸想し。百方諷諭をれども省せざる。由り其人一夜綱治の在らざるを暇ひ密かに宵女の室に入り之を挑みに。宵女は直ちに刀を以て之を刺殺し。徐か衣服を以て其死體を蔽ひ。夫の反るを待ち。具さふ其故を語り。神色從容として更ふ平常。異あるを。其變ふ處して宜しきを得るや。皆此類多し。然るに天之に年を假さば。

正徳二年。歳四十二。病ふ罹りて歿せり。
有竹子曰く。妾出の子を盲ふ。吾子の如く。已は美事たり。又更に婢を以て。夫の枕席を侍せしめ。毫

も妬忌の情なき。尋常婦人の能く及ぶ所あらんや。又人の妻妾たるもの。視るに。其家士或は出入の者と相通じ。甚しきハ則ち莖を其夫に薦むるものあり。婦道の衰ふるや。亦極まるといふべし。今宵子の果斷直に刀を其の腹に傳へ。如き事の太甚きに失するの嫌ありといへども。之を近世の婦道を欠くもの。ふ比されば。固より霄壤の差あるを覺ふあり。

第三十七 湯淺常山の母婦道あり。且人の困窮を憫むの心深き事

湯淺常山の母龍氏名を瑠璃といひ。其祖父如次父陳良俱ふ備前國侯に仕へて。吏事に任ぜ。龍氏の性行端

正方直よりて、幼より讀書を好む。年二十八よりて湯
淺子傑お嫁し、之に敬事する。猶君に事ながら如
く、子傑お亦之を待たぬこと、實の如く、子傑の目付
とあるに及び出て、則ち政お從ひ入て、則ち家事
を問はぬ。一切之を瀧氏お委し、又數江都お于役せし
留主中ハ、瀧氏其室に居て、門内の事を處するに、大小皆
法度あり。子傑の老ひて職を免るのち、疾お就きし
に、瀧氏衣帶を解るる。晝夜扶持介抱すること、凡そ六
年の間、一日の如く、少くも倦色を見ず。子傑死して、瀧
氏亦老ふまじし。子常山お未だ室あらざるが爲、瀧氏
親から婦功を執り、餘暇にハ女史を讀み、和歌を誦し、

又は時、小筆を鼓して、自から娛み、淫樂を聴かば、佛寺
小詣らば、僧尼巫祝を近づけ、奢侈の風を惡み、施與
の事お好み、人の困窮を聞けば、親疎の別なく、即ち之
を恤み、爲めに産を傾くる。顧みずかお至り、又常に
客を敬む。其の厚く、偶客の至るあまむ、必之を
留めて、酒饌を供し、慇懃丁寧、只其驩を失はんこと、
恐る。もの如く、常山を愛むかの深しといへども、
妄りに姑息を以てせん。過あまば、則ち之を正し、少
くも假貸することある。常山の少き時、嘗て之に語げて
曰く、昔者永延天皇雪後山を望み、香爐峯の雪と宣ひ
しをりから、侍女清原氏起て、御簾を捲きしといふこ

とあり白居易詩云。香爐峯雪捲簾看事已。前章に出た。當時婦女も其慧敏ある猶此の如し。況んや男子にして今世に生を不文無學あるハ實不愧づべきの甚だきものあるべ。汝其勉めざる可からざるなりと。常山の後に一世の鴻儒とありしも。全く瀧氏教育の致す所あるを知るべし。

有竹子曰く瀧氏の常山は於けるや。家庭の教育能く至りて。毫も間然ある所あり。此母ありて此子あり。今の母たるものにて龜鑑となれべし。

第三十八 梅屋の女先見の明ある事

加茂真淵の少壯あるとき。遠州濱松驛の逆旅梅屋氏

小鞠はま。其女を以て妻とあり然るに平生商家の事に營々あるを喜ばむ。只晨夕に心を書籍に潛め。更ふ家事を問ふことなき小由り。遂に養父の憎むところとあり。或時其妻真淵は謂へるやう。妾夙に君の才を觀ふに決して逆旅主人とあるものにあらず。他日必だ大に成る所あるべし。妾幸ひ一男を産みたるゆゑ之を撫養して成立不至む。以て家を嗣かむ。ふ不足む。請ふ君は早く終身の計を定めて名を天下に揚ぐべしと。真淵之小因り。遂に意を決して京師小出奔し。荷田春滿といへる人小從ひて。益螢雪の勞を積む。爾後其妻は堅く節を守り。家事を治むるこ

と數十年、真淵竟に國學を以て其名天下に聞え、後世皆師
宗とす。近日 朝廷又之を正四位を贈らるゝに至れり。

有竹子曰く、梅屋氏の女、特は商家の子として、教養素
ありといふにあらば、而して明眼炬の如く、真淵の凡
人よりあらざるを識別し、割きがたきの愛を割き、忍ぶ
可らざるの情を忍び、斷然之をして其志に所を達せ
しめ、身も獨り一塊肉を擁して、長く節を守り、家事を
治むもが如き、何ぞ其見の卓として、志の鞏あるや、此女
のぶときハ、絶て無くして、僅に有るものといふべし。